

我が師松村先生のレッスン

土田 英介

火曜日の昼下がり、松村先生のレッスンが始まる。眠い目をこすってぼく達が遅刻していくと、まだ教室はからっぽ。20分位経ってから「やーっ」と先生の声が聞こえてくる。近況報告をし合った後、一人の書きかけのスコアが差し出され、全員の表情がこわばっていく。

「世の名曲に匹敵するには…」とベートーヴェンやラヴェルなど一流の作曲家をライバルとするレッスンには、常に激怒と激励とが伴う。いつナイフを突きつけられるかわからないようなスリルに満ちた空間の中で、ぼく達は互いに猛烈に作品をけなしあうのであるが、先生はいつも本気で、愛情を持って接して下さる。今必要とされる音楽の実体と、真実の歌に気づかせようとするあまり、先生自身の生き方や考え方、又は過去の失敗談等までもぼく達に露呈してしまわれ、何かその場にいらなくなるほど自分の無能力さが恥ずかしくなることが度々あった。

先生はよく国立博物館に行かれ、一級の芸術作品に触れられている。自己の知識を全て忘却し、感覚を開放して、そういう作品と対峙しておられるのだ。そうしているうちに、先生とその作品との間に電光のようなものが走り、作品の生命が先生に注がれていく。それが多大なエネルギーとなり、音響と化し、先生の作品の原点となる。そうして生み出された作品は、普遍的な美をつかさどり、ファンタジーの固まりとなってぼく達の上にきらめくのである。

さて、レッスンはその後、飲み会となり、映画の話やら、俳句の話やら…あらゆる芸術について教えて下さる。何も知らないぼくは、いつも自分の無知を知らされて落ち込んでいく……。

さらに、サウナ、マージャン、囲碁と発展するようであるが、マージャンのできないぼくは、落ち込んだ所でドロップ・アウト。長い火曜日のレッスンは終わる。

松村先生、この掛け替えのない偉大な作曲家の個展がご盛会となることを、心よりお祈り申し上げます。(つちだ えいすけ、作曲家)



今年5月、民音現代作曲音楽祭委嘱作品「交響的譚詩」の初演を終えてほっと一息、ビールが美味しい筆者。



師松村禎三氏の厳しい作品評を聞く。